1989

生活新聞

No.139

Hakuhodo Institute of Life & Living

博報堂生活総合研究所

昭和ヒンドソング

（頻　度）

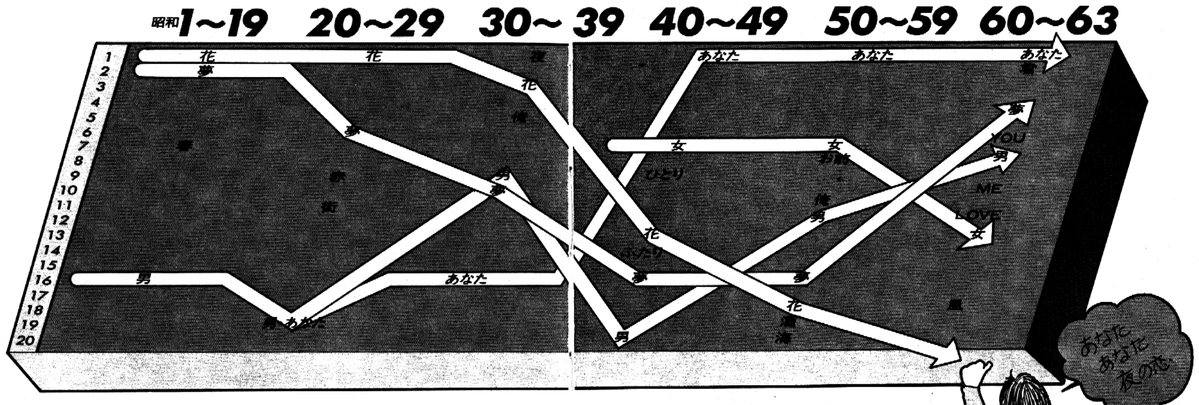
昭和の歌2700曲分析……6万語が語る昭和

この歌は、昭和の歌2700曲に使われた頻度の高い言葉の順に従い、作詞したものである。●の数字は、出現頻度の順位を示す。

「昭和の歌」調査
30代～40代の社会人男性　200人
20代～50代の主婦　220人
大学生男性　60人
大学生女性　116人
1989年6月実施

6万語が語る昭和

昭和の時代変遷と人々の心の動きを、各年代別の歌詞にあらわれる言葉の頻度の違いから探ってみよう。各年代別の曲目数は、昭和1年から9年までが81曲、昭和10～19年が297曲、昭和20～29年が345曲、昭和30～39年が540曲、昭和40～49年が642曲、昭和50～59年が536曲、昭和60～63年が259曲となっている。



●昭和1～19年

		(件)
1	花	94
2	夢	66
3	夜	63
4	恋	55
5	涙	47
6	風	45
7	春	44
8	月	43
9	雨	42
10	君	39
11	空	38
12	心	37
13	歌	32
14	朝	31
14	娘	31
16	男	30
17	青	29
17	胸	29
19	街	28
20	山	24

●昭和20年～29年

		(件)
1	花	95
2	夜	91
3	恋	83
4	君	78
5	歌	76
6	夢	72
7	風	57
7	涙	57
9	赤	51
10	胸	50
11	街	49
12	月	44
13	雨	42
14	思い出	41
15	心	39
15	空	39
17	私	38
18	娘	35
19	あなた	34
19	男	34

●昭和30～39年

		(件)
1	夜	139
2	恋	111
3	花	97
4	涙	93
5	俺	91
6	娘	74
7	風	68
8	人	66
9	男	65
9	夢	65
11	歌	62
12	心	56
13	君	54
14	雨	52
15	空	50
16	あなた	48
17	私	47
18	街	46
19	旅	45
19	胸	45

●昭和40～49年

		(件)
1	あなた	341
2	私	218
3	愛	202
4	恋	193
5	夜	177
6	君	141
7	女	135
8	人	130
9	ひとり	124
10	俺	122
11	涙	118
12	心	115
13	花	112
14	ふたり	97
15	雨	93
16	夢	89
17	街	88
18	別れ	86
19	雨	79
20	男	73

●昭和50～59年

		(件)
1	あなた	334
2	私	200
3	人	159
4	愛	154
5	夜	149
6	恋	137
7	女	128
8	お前	124
9	心	114
10	ふたり	104
11	俺	98
12	男	86
12	ひとり	86
14	涙	84
15	君	83
16	夢	76
17	街	75
18	花	71
19	酒	69
20	海	67

●昭和60～63年

		(件)
1	あなた	153
2	愛	86
3	君	86
4	私	85
5	夢	78
6	恋	77
7	You	74
8	男	61
9	心	57
10	Me	55
11	今	53
12	Love	51
13	女	47
14	夜	46
15	誰	45
15	胸	45
15	街	45
18	風	44
18	人	44
20	涙	41

「戦前から戦中へ」―「忍」の10年代

関東大震災の壊滅的な打撃から立ち直らないままに、昭和は始まった。昭和2年の金融恐慌、追い討ちをかける世界恐慌。そして、昭和6年には満州事変と暗い戦争への道を歩み始めた日本。そうした中で、人々はやり場のない怒りを「エロ、グロ、ナンセンス」といわれる世界に逃避した。ただ、こうした暗い時代であったが、昭和1年から9年までの歌にあらわれる言葉の頻度のトップは意外にも「恋」であった。

しかし、昭和11年の二・二六事件、つづく日中戦争、昭和16年からの太平洋戦争と戦時体制が進む中、言論の自由は失われ、検閲の時代へと進んでいった。昭和10～19年の言葉の頻度のトップは「花」であった。さすがに「恋」というのは減って31件で9位になった。

昭和1年から19年までの戦前から戦中までの歌詞をまとめてランキングしたのが右の表である。第1位は「花」、第2位は「夢」、第3位は「夜」、第4位は「恋」、第5位は「涙」である。特に、この中でも他の年代と比べて特徴的なのは「夢」という言葉である。この「夢」という言葉がベスト3に入ったのは昭和を通じてこの時だけである。夢のもてない時代だからこそ、人々は夢を求めたのだろう。

このように歌詞には、現実に存在しないからこそ、あえてそれを人々に訴えるものと、現実の状況そのものを素直に訴える場合とがある。どちらにしても、それが、人々の心情をとらえていれば共感を得られるのである。

また、この「夢」という言葉の推移をみると、昭和20年代には6位に、30年代には9位に、そして、高度成長期の40年代には16位まで下がっている。経済の成長、豊かさの進展とともに、人々の夢を求める気持ちが徐々に減っていったのである。ただ、50年代は16位のままであったが、60年代になって再び5位まで上昇している。これは、人々が夢を求め始めたことであり、それだけ、今が夢のもてない時代になったからかもしれない。

このほか、この時代の特徴的なワードをみると、第7位に「春」がある。この「春」は、他の年代ではベスト20にも入っていない。「夢」と同じように、現実との遊離はあるが、暗い冬の時代から人々が早く抜け出したいという欲求があらわれたのだろう。また、動詞などのランキングからは除外したが、この時代をよく映すものとして「泣く」62件、「散る」35件があった。勿論、この時代以外には高い頻度であらわれない言葉であり、こちらの方も素直にこの暗い時代をあらわしている。

「戦後復興期から高度成長期へ」―「燃」の20年代、「男」の30年代

昭和20年8月15日の終戦をもって、新しい昭和が始まった。1億総ザンゲのなか、戦前の価値観は大きく変化せざるを得なかった。ただ、歌の世界をみると、使われる言葉の頻度は、意外にも戦前と似た傾向をあらわしている。第1位は戦前と同じく「花」、第2位は戦前3位の「夜」、第3位は戦前4位の「恋」である。表向きの価値観は、大きく変わったようにみえたが、まだまだ人々の心の中には、戦前の価値観が根強く残っていたのだろう。

ただ、戦後の新しい価値観の芽生えというものも、この時からあらわれている。昭和40年代以降の主流となる「あなた」「私」という個人的な呼び掛けの言葉が、それぞれ19位、17位に初登場している。

また、この時代の特徴的なワードをみると、戦後復興の燃える時代を象徴する「赤」という言葉が9位にランクされている。「赤」がベスト20にランクされるのは、昭和の各年代を通じてこの時だけである。

この「赤」と「青」を「燃える時代」と「冷めた時代」のキーワードとしてとらえると、戦後の復興期から高度成長期の昭和20年から40年までは「赤」の方が多く、戦前、戦中の10年代とオイルショック後の50年代は「青」が多い。そして、大型景気到来の60年代は、再び「赤」が多くなっている。

このほか、都市集中化、都会へのあこがれを反映して「街」が11位に、「東京」もベスト20には入れないが22位に登場している。また、「マドロス」「ネオン」「ハワイ」などカタカナ語が歌詞の中に急激に増えたのもこの時期である。

経済白書に「もはや戦後ではない」と記されたのは昭和31年であった。1億総白痴化といわれるなか、昭和33年には、日劇で第1回ウエスタンカーニバルが行われ、ロカビリー旋風が吹き荒れた。昭和35年の安保闘争。同年の国民所得倍増計画から日本の本格的な高度成長がはじまる。そして、昭和39年には東京オリンピックが行われ、世界の中の日本へと進んでいった。

昭和30年代のランキングをみると、第1位が「夜」、第2位が「恋」、第3位が「花」とベスト3は順位こそ違うが、昭和20年代と同じ言葉である。ただ、この中で3位に落ちた「花」は、その後下落の一途をたどり、昭和40年代には13位、50年代には18位、60年代にはランク外となった。「花と散る」といった日本的な情緒は、30年代から40年代の高度成長期に失われてしまったのである。

また、昭和30年代は戦後復興から高度成長へと日本が急成長を開始する時期であり、その主役は、企業戦士の「男」であった。この傾向は、ランキングにもあらわれている。「俺」という言葉は、これ以前はベスト20にも入ったことがなかったが、いきなり第5位に登場している。「男」も第9位とはじめてこの時ベスト10入りを果した。強い男のロマンが感じられる時代であった。

また、昭和43年はGNPが世界第2位になるといった経済的繁栄が進む中、その一方で公害問題がクローズアップされ、昭和44年には、学園紛争の頂点である安田講堂の落城など、高度成長のかげりもみえる時代であった。その中で、若者たちは、新宿西口でのフォーク集会など自分たちの心を歌に託した。この時が日本において、最も音楽と社会の結び付きの強い時代であったといえる。その後、昭和45年の大阪万博を頂点にして、昭和46年の変動相場制によるドルショック、昭和48年のオイルショックにより日本経済の高度成長は終焉へと向かっていく。この昭和40年代は、変化の激しい時代であり、人々の価値観も日々変わっていった。これは、ランキングにも如実にあらわれている。第1位は「あなた」、第2位は「私」、第3位は「愛」である。この上位に入った3つの言葉は、すべてこれ以前はベスト10にもあがらなかったものである。

つまり、この40年代からは、主観的に、自分の気持ちを素直に歌にするといったものが増えたのである。その結果が、私小説的な「あなたが○○した」「私が○○した」といった「あなた」「私」「ひとり」「ふたり」といった歌詞の急激な増加となった。「個」の時代のはじまりである。

この40年代は、歌詞の変化にもあらわれているように、昭和の価値観の大きな転換期であり、この大きな流れは、50年代以降にも引き継がれていく。

また、この年代の特徴をみると「女」という言葉の増加がある。これ以前はベスト20までに一度もあらわれたことがなかったが、突然7位に登場した。ウーマンリブが日本に上陸したのは昭和45年であった。この「女」という言葉の増加と対照的に、この時大きく減少したのが「男」である。昭和30年代の9位から、一気に20位まで後退してしまった。30年代が「男」の時代だとすれば、これにつづく40年代、50年代は「女」の時代ということができる。ただし、60年代に入り、再び「男」が「女」を上回り、「男」復活の予感も感じられる。

昭和50年代は、オイルショックの余波で戦後最大の不況、完全失業者100万人突破といった暗いムードで始まった。また、一方で国際婦人年世界会議がメキシコで開催され、本格的な「女」の時代が到来する。昭和51年には、新しい価値観を持つ戦後生まれが人口の過半数を超えた。また、昭和52年にはカラオケブームが起こり、ただ聞くだけの音楽から、参加する音楽へと人々の意識は変わっていった。

昭和50年代のランキングをみると、第1位は「あなた」、第2位は「私」、第3位は「人」、第4位は「愛」、第5位は「夜」である。これは、40年代のベスト5と比べて4つまでが同じ言葉であり、50年代は、基本的には40年代と似たような傾向といえる。

ただ、この中でもこの年代の特徴的なワードをみると「僕」「君」といった子供っぽい言葉が減り、「俺」「お前」といった大人っぽい言葉が増加した。特に「お前」というのは8位にランクされているが、他の年代ではベスト20にも入っていない。

このほか、「酒」という言葉も19位に入り、「俺」「お前」とともに大人のイメージの復活が感じられる。ただ、その一方で20位の「海」、ランク外だが26位の「夏」といった若者を感じさせる言葉も増えており、「軽さ」と「重さ」の2極化の様相をみせたのが、昭和50年代であった。

「そして、今」―「甦」の60年代

昭和60年代に入ると、ランキングに新たな動きがあらわれる。第1位だけは、昭和40、50年代と同じく「あなた」であるが、第2位には「愛」と「君」が同数で入った。特に「君」は、昭和20年代以来久々のベスト5入りである。第4位は「私」、第5位には「夢」が、これも昭和10年代以来ベスト5に入った。このほか、8位の「男」、18位の「風」といった昭和40、50年代に下降したものが、もう一度復活している。最近のレトロブーム、昔のヒット曲のリメーク盤ブームなどもこうした傾向のあらわれである。ただ、その根底にはもっと大きな保守化という流れがあるのかもしれない。

もうひとつの特徴は、7位の「You」、10位の「Me」、12位の「Love」にみられるように、英語がそのままアルファベットで示されていることである。最近では、ヒットチャートの半分以上を英語のタイトルが占めるということも珍しくはない。歌の世界も国際化してきたということだろう。

今回の「昭和の歌」調査で、最近の歌詞の変化について聞いたところ、やはり外国語が増えているという意見が多かった。それも昔は、単語だけだったのが文章へ、英語だけだったのがフランス語など他の外国語へと。ただ「何でもかんでも外国語を使えばいいと思っている」といった批判の声もあった。

このほか、「昔の詞は表現が奥ゆかしいが、今のはリアルすぎてどぎつい」「昔の詞には夢があったが、今のは露骨で味気無い」「昔の詞は思いが深いが、今のは軽くてサバサバしている」「昔の詞は聞いていて情緒が浮かび、胸にジーンとくるものがあったが、今のは言葉の羅列にすぎない」など、今の歌詞に対する不満は大きい。自分の昔を懐かしみ、その時代がよかったと美化する気持ちが強いこともあるが、歌への思い入れの強さが感じられる。

昭和の歌をその時代の変遷とともにみてきたが、人々が意識するにせよ、しないにせよ、その時代時代に使われた言葉は、その時々の人々の価値観をあらわしているものであった。激動の時代であった昭和。この時代も、やはり「歌は世につれ」ていたのである。

歌は世につれ、世は歌につれ

「部長、一曲歌ってくださいよ。」「いや一、俺はいいよ。」「まあ、まあ、そう言わずにお願いしますよ。」「そうか。じゃあやるか。○○ちゃんも一緒に頼むよ。ちょっと古いかなあ。」一同拍手。歌うのは、いつもお決まりの「東京ナイトクラブ」。「課長もお願いしますよ。」「よし、俺の青春ソングをいくか。」歌うのは「君といつまでも」。セリフの部分で、鼻などかいても誰もわかってくれない。しかし、他人がどう思おうと、持ち歌には、その人の思い入れといったものがある。そして、その歌の中には、必ずその人が共感できる何かがあるのだ。

歌は時代を映す鏡であるといわれる。昭和が終わった今、人々の心の変化を昭和の歌2700曲を通じて探ってみることにする。そこには、昭和という時代変遷の中で、人々の意識、価値観といったものがどのように変化してきたかが浮き彫りにされている。

分析方法は、個別の歌と時代を結び付けるといった方法ではなく、正月の生活四季報で行っている新聞、雑誌にどんな言葉が使われていたかといった、言葉の頻度を数える方法を用いた。対象とした曲は、昭和1年から昭和63年までの演歌からポップス、ニューミュージックなど、幅広い意味での日本の歌謡曲とした。なお、各曲とも、一番の歌詞（区別がないものは一番と思われる所まで）のみを対象とした。また、歌詞の中のセリフの部分も除外した。この結果、分析総語数は80,588語となった。同時に、男女598人を対象に「昭和の歌」に関する意識調査を実施した。

6万語が語る日本人の心
―「あなた」と「夜」の「恋」

昭和の歌によく使われた言葉は、昭和の時代を通じて日本人の心に共感を呼んだものとみることができる。右の表は、昭和の歌に使われた言葉のベスト50である。総合第1位にランクされたのは「あなた」で926件、第2位は「夜」で665件、第3位は「恋」で656件となる。このベスト3をみると、昭和の歌は「あなたと夜の恋」になる。第4位は「私」、第5位は「愛」、第6位は「花」がつづき、次は「私の愛の花」になる。

「昭和の歌」調査でも、恋の思い出と歌との関係は強かったが、言葉の頻度にもこの傾向がよくあらわれている。

表紙に掲げた「あなたと夜の恋」の歌詞は、このベスト50にあらわれた言葉を頻度の高い順に並べて作詞したものである。現題からいえば、昭和の歌の代表であり、人々の心に共感を呼ぶ答であるが、はたしてどうだろうか。ゆっくりと味わっていただきたい。

その他、ベスト50の中から、特徴的なワードを探ってみる。「男」と「女」の争いは、わずか10件差であるが「女」の方が12位で、13位の「男」を押えた。昭和の時代は、やはり「女の時代」だったのだ。「ひとり」と「ふたり」は、「ひとり」の方が15位で、20位の「ふたり」を上回り、孤独の淋しさの方が、ふたりの明るさよりも人々に共感を呼んでいることがわかる。また、「今日」と「明日」は、34位と49位で「今日」の方が高く、「明日を信じて」というよりも「今を生きよう」といった現在志向が読み取れる。

●昭和の歌に使われた言葉ベスト50

		(件)
1	あなた	926
2	夜	665
3	恋	656
4	私	605
5	愛	499
6	花	492
7	君	481
8	人	447
9	夢	446
10	涙	440
11	心	418
12	女	359
13	男	349
14	街	331
15	ひとり	330
16	風	329
17	俺	307
18	雨	300
19	歌	299
20	ふたり	288
21	胸	286
22	誰	254
22	別れ	254
24	今	244
25	僕	234
26	空	233
27	赤	229
28	お前	221
29	娘	212
30	思い出	211
31	旅	195
32	酒	192
33	海	181
34	今日	177
35	月	174
36	星	168
37	時	161
38	青	159
38	命	159
40	灯	156
41	さよなら	150
42	白	145
43	手	144
44	顔	133
45	子	132
46	東京	130
47	春	126
48	ひとつ	124
49	明日	120
49	You	120

ENGLISH

●英語の単語ベスト10

1	You	120
2	Love	97
3	Me	76
4	Baby	49
5	My	42
6	Kiss	28
7	No	24
8	Get	22
9	Dance	20
9	Stop	20

PLACE

●地名のベスト10

1	東京	130
2	銀座	47
3	長崎	31
4	大阪	27
5	新宿	22
6	横浜	17
7	江戸	13
7	京都	13
7	函館	13
10	赤坂	11

BODY

●身体の部分ベスト10

1	胸	286
2	手	144
3	顔	133
4	瞳	119
5	目	108
6	肩	76
7	髪	63
8	くちびる	54
9	足	50
10	頬	44

COLOR

●色のベスト5

1	赤	229
2	青	159
3	白	145
4	緑	42
5	ブルー	29

英語の頻度は「You Love Me, Baby」

次に、言葉の頻度を、ジャンル別にみることにしよう。英語のジャンルをみると、第1位は「You」、第2位は「Love」、第3位は「Me」である。日本語で多い「あなた」「愛」「私」といった言葉が英語になっただけであるが、これを文章にすると、日本語では「あなたと私の愛」といった重いイメージになる。これに対して、英語では、「You Love Me, Baby」となり、軽い感じになる。最近の英語の歌詞の増加傾向もこうした明るさ、軽さを狙っているのだろう。

歌の世界も東京集中

地名をみると、第1位は「東京」で130件と圧倒的に多い。2位も「銀座」、5位にも「新宿」、10位にも「赤坂」と歌詞にも東京集中化現象はあらわれている。その他では「長崎」「横浜」「函館」など憂いあふれる港町があがっている。

目はロほどに物をいった

身体の部分のベスト10をみると、第1位は「胸」、第2位は「手」、第3位は「顔」である。以下は「瞳」「目」がつづき、8位の「くちびる」、12位の「口」を上回る。やはり、「目はロほどに物をいう」のである。また、全体をみると「顔」の中をあらわす言葉が多かったが、さすがに「鼻」だけは歌になりにくいらしく、6万語の中でもわずか5件しかなかった。

カラーはトリコロール

色をみると第1位は「赤」、第2位は「青」、第3位は「白」で、この3つの色が他を圧している。トリコロールは健在である。燃える「赤」、海、空などのすがすがしい「青」、純白で汚れない「白」など、イメージのはっきりした色でないと、歌詞の意味が人々の心に伝わらないのである。

人々の抱く歌謡曲のイメージは
「涙」「別れ」「酒」

実際に歌謡曲に使われている言葉と、一般の人々が持っているイメージには、どの程度のギャップがあるのだろうか。今回の「昭和の歌」調査で聞いてみると、一般の人が考えている歌謡曲によく使われる言葉というと、第1位が「愛」で195件（実際の頻度では5位）、第2位が「涙」で183件（実際は10位）、第3位が「恋」で161件（実際も3位）、第4位が「別れ」で123件（実際は22位）、第5位が「酒」で93件（実際は32位）となる。何となく「涙」「別れ」「酒」など日本的な湿っぽさ、演歌っぽいイメージを一般の人は強く抱いているようである。ただ、歌は世につれるものである。人々の心の動きを探りながら、歌謡曲も時代とともに人々の考えている以上に大きく変化しているのである。

歌は思い出をつれ

パブロフ効果

コマーシャルのバックに流れる歌。「アッ、この歌は！」遠い過去の思い出が鮮明に甦ってくる。音と記憶の結び付きは強い。ベルが鳴るとよだれが出てしまうパブロフの犬ではないが、ある歌を聞くと、突然昔の世界にタイムトラベルしてしまうのである。

今回の「昭和の歌」調査でも、思い出の歌がないという人は、わずか2％しかいなかった。また、思い出の歌というのは年代の違いによりパターンがある。たとえば、40代後半男性は石原裕次郎の歌、30代後半男性は加山雄三の歌、20代後半女性は松任谷由美の歌が多いといったように。これは、何才位の時の歌が思い出になっているかということに影響されている。今回の調査でみると、思い出の歌をあげた時期の平均年齢は30～40代男性は24才、20～50代主婦は21才であった。今の年齢が何才であろうと、思い出の歌というと青春時代にプレイバックしてしまうのである。

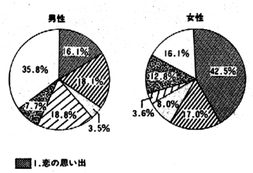
歌との思い出は「女は恋」「男は無」

思い出の歌は、その人のどんな思い出と結び付いているのだろうか。図表にみられるように男女差がかなりある。女性の場合は「恋の思い出」が圧倒的で全体の4割を超えている。「初恋だった彼との楽しい思い出」（20代主婦）「学生時代につきあっていた彼と初めてドライブにいった時、カセットから流れてきた。」（30代主婦）「大学時代、ボーイフレンドの中で一番私を大事に思ってくれた人との思い出」（40代主婦）「この歌のように、好きな人と一緒になれなかった思い出」（50代主婦）といったように、年代にかかわりなく、初恋、片思い、失恋といった昔の恋の思い出がたくさん出てくる。ただ、夫との恋の思い出をあげた人はその中で9％しかいなかった。

これに対して、男性の場合は「恋の思い出」は16％と2割に満たない。これに代わって多いのが「学生時代に受験勉強をしながらよく聞いた歌」「卒業コンパの時にみんなで歌った」といった恋とかかわりのない若い頃の思い出（18％）。また、中年男性に多いのが「カラオケで初めて歌った曲」「若いころ、喫茶店やパチンコ屋でいつもかかっていた歌」「独身の頃、行きつけの飲み屋でよく流れていた歌」といったような受け身的な思い出（19％）である。

男性と女性の歌との思い出の違いをみると、男性の方が今幸せなのか、さっぱりしているのか、感受性が鈍いのか。どちらにしても、女性と比べて、男性の思い出は、貧困といわざるをえない。

●どんな思い出とつながっているか



カラオケ覚醒効果

こうした過去との思い出を歌を通じてさらに鮮烈に甦らせてくれるのがカラオケである。最初の1、2曲は、最近の歌などで一般受けをねらっているが、だんだん興がのってくると、自分の青春時代の歌になってしまうのである。

カラオケを成立させるための三要素とは「拍手」「酒」「照明」である。しかし、今この常識を打ち破るものがあらわれている。これが、レンタルルーム方式でカラオケを楽しむ、カラオケボックス、カラオケコンテナといわれるものである。カラオケボックスの料金は、ボックスレンタル料が30分で100～400円くらい、このほかに1曲ごとに100円かかる。ここには、スナックに行けない高校生などが学校帰りに寄り集まり、昼間の時間帯でも1～2時間持ちは当たり前といった盛況である。

今のところは、若者中心の利用になっているが、今までみてきた歌と思い出の結び付きの強さを考えると中年男性、女性にとっては、この「カラオケボックス」というのは、懐かしい青春時代にもどる「タイムマシン」なのである。

生活新聞 139号　発行/(株)博報堂　発行日/1989年8月18日
企画編集/博報堂生活総合研究所(生活総研) TEL 03(233)6450　〈社内資料〉